

NCS

Nature Conservation
Society of Hokkaido

HOKKAIDO

2000年 2月 NO.109

..... CONTENTS

2000年・北海道の自然保護

..... 俵 浩三.....	2
爺爺岳に登った..... 鮫島惇一郎.....	3
北海道・各地のニュース.....	6
護 一 岨山の取組について.....	
..... 山岡 桂司.....	8

北方四島の自然保護について

..... 近藤 憲久.....	9
連載・獣医さんのお話シリーズ(6).....	10
日高横断道路の工事中止を求めて.....	10
活動日誌、要望書など.....	11
お知らせコーナー.....	12



オホーツク海の流水 撮影・大館 和広

2000年・北海道の自然保護

会長 俵 浩 三

2000年を迎えたのを機会に、北海道の自然にとって、2000年とは何だったのかを考えてみましょう。

悠久の自然という言葉がありますが、北海道では過去2000年間のうち約1900年間は、自然が主人公であり、人間の存在は小さいものでした。そこに暮らすひとびとは自然と共生してきました。しかし100年ほど前、大規模な開拓がはじまり、原始林が伐採され、農地や市街地が拡大し、道路や鉄道も伸びました。河川改修も進みました。20世紀の北海道は開拓・開発の時代であり、人間が自然を支配し、自然に代わって人間が主人公になることを目標としてきたのです。

その結果、私たちの暮らしは便利になり、豊かになりました。ありがたいことです。こうした傾向は北海道ばかりでなく、先進国に共通のものだったといえるでしょう。しかしその反面で、自然は多様性を失い、身近な自然ばかりでなく、地球環境の未来にも赤信号がともるようになってしまいました。

自然保護は、開発の行きすぎにに対する反作用でもあります。「作用あれば反作用あり」というのは自然の法則です。開発が行きすぎれば、自然を守ろうとする意識が生まれるのは、ごく「自然」なことです。20世紀も終わり近くになって、自然保護はやっと少しずつ市民権を得るようになってきました。

1999年の北海道での自然保護は、多くの皆様のご支援により、大雪山の士幌高原道路計画や、千歳川放水路計画が中止されました。これは、20世紀から21世紀に向かう時代の流れを象徴するできごとだった、とあってよいでしょう。2000年1月、自然との共生をかかげる愛知万博が、その会場となる海上の森（かいしょのもり）の跡地に大規模な住宅開発を目論んでいることが、博覧会国際事務局（B I E）から、「20世紀型土地開発」ときびしく批判されたことが報じられました。また徳島県では、吉野川の可動堰建設計画に徳島市民が住民投票で「ノー」という意思表示をしました。これは20世紀から21世紀に向かう流れを象徴したものでしょう。

21世紀に向けての北海道では、国立公園を始めとする自然公園や鳥獣保護区には、これ以上の開発は不要で、むしろ19世紀までの自然環境をとり戻す努力こそが、必要だと思います。また身近な自然環境で、自然の豊かさを保たさせる努力も必要です。

その第一段階として北海道自然保護協会では、「日高横断道路の抜本的な再評価」を求めていきたいと考えています。また北方四島の自然保護にも、積極的な関心を抱いていきたいと考えています。それらの詳細は「会誌」38号に紹介される予定です。

多くの皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

爺爺岳に登った

鮫島 惇一郎

昨年の初夏、世界的火山学者の勝井義雄さんから電話があった。「国後に、標高1822mの爺爺岳というのがあるでしょう。来年、調査しようという企画があるのだけど、どうだ？」というのだ。お断わりする理由なんかあるわけがない。すぐに「OK」で、参加させていただくことになった。聞けば朝日新聞社創立120年、北海道支社開設40年の記念事業の一企画ということであった。

むかし知床半島の先端に近く、知床岳に登ったことがある。その頂きから青い海をへだてて国後島が眺められた。晴れた日であったからまことに近くその島があった。島には幾つかの山が連なって見え、そのずっと左に特徴ある山があった。かつて耳にしたことのある山、チャチャ岳に違いない！と、なぜか胸がときめいたのをはっきりと覚えている。訪れることのできない島、山という現実が、より強く郷愁に似た想いをかきたせたのかも知れない。その日から四十数年の歳月が流れていたのだ。

恩師である館脇 操先生は、戦前に千島列島の植物をよく調べられていた。その調査にともないあまたの手札版の写真をとられていたが、戦後まもない頃、故あってネガからの焼き付け依頼をお引き受けしたことがあった。暗室の赤い光のなかで、つぎつぎと浮かび上がる鳥々の姿、山を飾る木や草の像は、訪れることのできない鳥々の魅力を語りつづけた。そしてまた、恩師の恩師である宮部金吾先生の米寿の祝賀講演会のおりに、館脇先生が話された「宮部線に就いて」の講演は、鳥々への憧れをよりつづらせたのだ。宮部線はいかなれば、フロラの滝だと表現された言葉も耳に残っている。

ビザなし渡航の枠のなかで、日ロ専門家交流というのは初めての機会なのだそうだ。古釜布では初上陸のしきたり、フレップ・ソリで迎えられ、それなりの挨拶、交歓後、軍用トラックを改造したバスで景勝地、材木岩へ向った。案内のロシア人女性が、国後ハイウエーと紹介する凹凸道を突っ走り、オホーツク海側にでた。ときに荒波洗う玉石浜を、水しぶきを上げながらバスは走った。

こどもの頃、改造社が出版した日本地理大系の北海道・樺太編をみたことがあった。そこに掲載されている写真で知った材木岩が、いま目の前にそびえていた。なにか不思議な気分になった。

ここからたかだか30数キロの彼方に、海をへだてて連なっているのは、まぎれもなく知床半島。残念ながらこの日、知床岳の頂は雲の中にあつた。歓迎の交流夕食会のあと、ロシア側の専門家と合流し、ロサ・ルゴーサ号で、雨となった古釜布を後にした。行く先は賽の河原つまりリベジヌイ沖であつた。

夜は明けたが霧雨であつた。風も少しはあるようだ。本船からまず伴走船、第38晋洋丸に乗り移り、さらに船外機付のボートに移って砂浜を目指す手順であつた。偵察隊が浜の具合を確かめに出かけていったが、ヤマセが強くてしばらく待機、という電話連絡。ボートから浜に上がるのに波が高くてずぶ濡れ間違いなしというわけだ。かつて波島大島を離れるとき、磯船がすっかり海水に浸かってしまった夜を思い出させた。

それでもややあつて、波が少し落ち着いたという情報をもとに一気に上陸となった。浜は真っ黒の砂。波で濡れているのかと思ったのだがこれは大違い、1973年、爺爺岳の中腹に形成された爆裂火口から降った火山噴出物そのものであつた。

海岸台地にはオンタデ、オオブキ、チシマアザミ、マルバトウキなどが生育し、コウゾリナやクサフジの花が彩りを添えた。台地の真中に寸詰まりのエゾマツがあつた。火山噴出物を



調べていた人たちの話では、50センチも深く埋められてしまっているという。

かつての姿を残していると考えられる林分が、台地の先に見えていた。グシャグシャに濡れる覚悟で、藪を漕いで行ってみようかと思ったが止められた。あそこは熊の巣？だというのだ。ここがほんとうに国後島なんだろうか。爺爺岳の麓なのか。景観といい植生といい知床半島とよく似ているのだ。波の音まで？そっくり。変わった植物だって見かけなかった。人の世にある国境線の不合理さを思いながら島の第一夜が更ける。

小雨の朝を迎える。朝飯は蕎麦とラーメン。ちょっと心許ない食事だが、頑張らねばなるまい。背丈の低いクマザサやオオブキ、チシマアザミ、オオイタドリなどで覆われる急斜面を登りきると、地形図どおりの緩斜面。エゾマツ、トドマツを交えた針葉樹林の間を刈り払い道が続いた。今回の調査のため、前以て自然保護区のスタッフが藪の刈り払いをしてくれたというのだ。機械ではなくてすべて手刈り。大変な作業だったろう。ときおり高さが15センチ、太さ40センチほどのエゾマツやトドマツの林分に出合うが、広葉樹の混交が目立つ部分もあった。キハダ、アカイタヤ、ケヤマハンノキ、ミズナラ、ウダイカンバ、ノリウツギなど北限に近い樹種とはいいいながらも、北海道で見慣れたものばかり。

噴火以前は、針葉樹林が広がっていた美しい山麓だったに違いない。登るにつれて痛々しい枯損木が増えてくるが、わずかな凹み、横たわり朽ちはじめている幹、立ち枯れたままの幹の周りには、オンタデ、オオイタドリ、オオブキ、ヨツバヒヨドリ、ヤマハハコ、チシマアザミなどが群生し、ときにはツルアジサイが低く地面を覆っていた。

標高450センチあたりからは深く火山砂礫に覆われて、一本の生立木もない。黒い砂礫地に風雨に曝され白い骨と化した針葉樹林の姿がそこにあるだけなのだ。昔のトドワラを彷彿とさせる景観が大きく広がっていた。地球的な営みは時として、命あるものにたいしてまことに非情である。そしてまた、洞爺湖の南に位置する有珠山の、1977年噴火直後に出現した火口原の白骨林ともそっくりであった。



砂に埋もれて淡紅色の花が一株目に付いた。

コマクサであった。火山弾があちこちに散在するこの砂漠同然の地に、絶え間なく風に揺れ続けるコマクサ、なんと声をかけてやったらいいものか。言葉が見つからぬ。

夜明けは早い。朝飯が終わるとすぐに出発。傾斜がきつくなると結構息がきれてしまう。情けない。ミヤマハンノキやタカネナナカマド、低いダケカンバを交えた低木林の隙間には、メアカンキンバイの群落を展開していた。あの可憐な黄色の花は満開で、群落の大きさは畳二枚から三枚でいどの拡がりを見せていた。その広さにいささか感激してしまうのだ。雌阿寒岳でも大雪山でも、このように大きい単一の群落は見たことはない。

ほかの高山植物とは探してみるが、固い蕾のイワブクロ、つまりタルマイソウやオンタデしか見当らぬ。ときには背の低いチシマアザミの花が見つかるくらいであった。

林のなかでは、かなりしっかりと踏み後が続いたが、背の低いハイマツの森や、ミヤマハンノキも株立ちとなり島状に散在するあたり、標高800センチほどまで登ってくると、これは大変だ。三步あがって二歩ずり落ちるってところか。一人として苦労しない者はいない。スコリアの大斜面であった。

薄い紫いろのタルマイソウが至る所に大小の株を造るようになり、その間にコマクサがかなり密に散在している。コマクサもタルマイソウも踏み付けないように歩こうとするわけだが、上手に避けられない場合も出てくる。ひどく濟まない気分になってしまう。

斜面に生育するおびただしコマクサの間のあちらこちらにも白い花が見つかる。念のため、5センチ×5

毎の範囲にある淡紅色の普通花と白花個体を数えてみた。違った五ヶ所で数えた結果は、普通の花の40から50にたいして、白花は2から3個体が確認された。大雪山や雌阿寒、知床などで探しても、めったに白花個体は見つかるものではない。今までに大雪山で一個体だけ見たことがあるぐらいだ。はっきりとした理由はよく解らないが、この地区に生育地が限定されたうえ、自殖率が高いのではと推測している。

なんという壮大な存在だろうか。いま赤茶けた中央火口丘が目の前にあった。いくたびか訪れたことのある渡島大島の姿に、あまりにもよく似ている。違いといえば、規模は爺爺岳がはるかに大きいことと、植生の回復が大島ほどに進んでいないことであろうか。これは山体が形成されてから経過した時間の違いにあると考えられる。

火口原にはミヤマクロスゲやタルマイソウが散在し、密度も濃くはない。ひどくいじけたコマクサはほんのわずか、スコリアのそれと比べものにならない。ハイマツの株が点在しているが、せいぜい火口原のアクセントといった程度だ。もちろん、外輪山の南側、三角点のあるあたりから西側にかけては、かなり大きな群落をつくっている。

キャンプ近くには雪渓があり雪解け水が陽の光を返しつつ流れ続けていた。しかし、その水は細流となって延びているわけではない。水は遠慮なく大地に吸い取られ、その先にはバサバサとした砂礫地が広がっているだけ。とにかくこの山、乾いていると思う。

キャンプ地のすぐ裏から「江戸揚げ」スタイルの溶岩流の上をたどる。ガサガサで、固い岩の塊は、うっかり転んだり、隙間に足を踏み入れようものならこれは大変だ。慎重に足を運ばなくてはならない。その乾き切ったと見える溶岩流のうえに、タルマイソウが点在していた。決して大きな株ではないが、しっかりと根をおろし可憐に、しかも誇らしげに花を付けているのだ。彼らはどうやって水をこの岩上で摂取しているのか。その逞しさには脱帽するだけだ。さらに驚いたのはエゾツガザクラであった。1812年噴火の黒い溶岩流のところどころに生育しているのだ。がさがさの溶岩の上というのは初めての出会いであった。黒い溶岩の上の薄紅の小さな花束。深く印象的な事実であった。溶岩のつくり、これらの植物を養うからくりがあるに違いないのだろう。

調査作業を終えて下りてくる隊員が、火口壁は切り立っているし、さらに風が強いから気を付けてと、声をかけてくれる。雲が小気味よく飛ぶ。火口壁であった！背骨に電気が走るとよくいうが、目を見張る一瞬であった。その時、突風とでもいいたい強い風に、おもわず地面に伏せてしまった。しかし、63度もある大地であった。噴気孔のすぐ近くだったのだ。あわてて離れてみたが、ガスと水蒸気に揉まれて、カメラのレンズはすっかり曇り、ファインダーの向こうにはほんやりとした映像だけ。

深く鋭くえぐられた火口には言い知れぬ迫力がある。かつて灼熱の壮絶なドラマがここで演じられたのだ。はるか昔の物語だが、その痕跡は火口壁の、火口底の随所に印されていた。そしてなお山は活動を止めていない。

それにしてもこの中央火口丘に生育している植生は、なんと簡単なこと。大雑把に言えば、タルマイソウにメアカンキンバイを少々というところであろうか。

7月30日から8月3日までの日口専門家交流による爺爺岳調査は終わった。多くの方々の惜しみない協力のおかげで、大きな研究成果が得られたのである。それぞれの、専門分野で、まとめられた成果は後日公表されることになっている。

いろいろな事を学んだ。読む、聞くことを上回る、目で見て確かめる大切さをあらためて噛みしめている。これを機会に日口両国の交流がさらに発展することを期待している。

当然といえば当然だが、北海道の知床半島とあまりにもよく似ている。自然の豊かさは両者ともひげをとらない。同じ植物が生育し、似た景観を造り、自然界には国境というものはない。人間たちが勝手に作った境界線。不合理な存在だと思う。知床半島と国後島、色丹島などひっくり返して世界遺産にと日本の識者もロシアの識者も考えている。これからの重要な課題となってくるはずである。

新たな歩道・観察路の整備は必要か？

五十嵐敏文

(野幌森林公園の自然を語る会代表)

野幌森林公園の休養園地区が整備されつつある。昨年11月にオープンした埋蔵文化財センターは、この整備事業のひとつである。同センターは江別市立文京台小学校を半分囲むようにして建設されたため、同校児童から自然体験の場を奪い、教室からの同公園の自然の眺望も奪った。「環境教育」の大切さが言われる中、全く首をかしげたくなる。

さて、今ひとつの計画は住民の強い反対にあい、大幅な変更を余儀なくされた。

現在、大沢口前では既存トイレの改修が終わり、駐車場の改修・「自然誌ふれあい交流館」完成が近い。そして、今年、新たに歩道・観察路の整備が予定されている。

この歩道は施設間の連絡路であり、百年記念塔から沢を渡り、同センターを經由して同交流館に至るものである。しかし、この地区には既存の道路がある。多少遠回りにはなるが百年記念塔からそれぞれの施設へは行ける。この歩道はキツネやアライグマの通り道、山菜採りをする人間の周辺への侵入路ともなり、野鳥の繁殖域を侵すことになる。

地域住民が3年間行ったこの地区の鳥類調査の報告書によると、新たな歩道はオオジシギ（RDBでは希少種）のテリトリーを通過する。また、同センターの建設によりコウライキジの生息域に変化が見られたという。

私たちは生き生きとした自然を楽しみたいのであり、今ある道路で満足できる。

同センターを含む整備事業は自然の利用の在り方が問われている。同公園の自然を蝕む新たな歩道・観察路整備は見直すべきではないだろうか。

(江別市在住)

北海道 各地の

南北海道自然保護協会2000年の課題

一戸 静夫

(南北海道自然保護協会広報部)

1. 函館とその周辺の自然保護にかかわる問題では、函館地域の野生生物の盗掘や密猟防止のため、「北海道盗掘防止ネットワーク」が、南北海道自然保護協会、函館山楽クラブ、函館自然倶楽部、函館植物研究会、日本野鳥の会函館支部、函館アスナロ山岳会で結成され、それぞれの活動を進めていく中で、関係機関の協力も得て、パトロール活動を進めています。
2. 函館山登山車道交通渋滞問題解消対策が検討され、渋滞緩和策を実施しながら推移を見守っているところです。函館山の周遊車道建設阻止の運動こそが当協会設立の原点でした。貴重な自然と経済に占める価値から、函館山をどのような形で将来に残していくのか、重要課題と考えています。
3. 昨年10月、当協会主催の「自然フォーラム・身近な自然を語る集い」を開催しました。その中で、身近な自然に子どもたちを触れさせることが必要だとか、消費生活にどっぷり浸かっている子どもたちをなんとかしなくてはとか、街と自然の境目、里山がゴミ捨て場になっているなど切実な問題が提起されました。
4. 当協会の会報は年3回発行されます。今年も自然環境の保護が重要なことを地域色豊かに市民にアピールしていこうと思います。会員になりますと、年間2000円の会費で読むことが出来ます。申し込みは0138-57-0486(事務局・宗像)まで。(函館市在住)

士幌高原道建設の代替案は？

池田 啓介
(理事)

士幌高原道路建設が中止になった後、それに替わる地域振興策を協議する道のプロジェクトチームが四町（上士幌・士幌・音更・鹿追）の振興策づくりを支援するため、滞在・体験型観光の現状などを調査する方針が出された。それに対し、民間サイドで東大雪地域フォーラムがもたれた。地元住民の声を大切にしなければと住民からの意見を強く要請しようということである。

地域の魅力や現状の課題について論議する場が必要との声が地元住民から立上がり、意見も多く出された。グリーンツーリズムや森林の再生プロジェクトなどや、川・水・森林空気などの自然界の大きな資源と人間とのかかわりを考えることが、今、私たちにやれることでないか。自然は自然のかたちで保護し、一度壊れた原野や森林伐採地は早く復元できる手だてをしていかねばならない。

参加者のいろいろな意見を地域振興策の取り組みとして、“自然は地域の最大の魅力”として再認識していくことが地域の発展につながるのではないかと、地域で今後開かれるフォーラムに期待をもっている。道は振興策の柱として、農業、環境、観光を掲げ、四町をバックアップしようとしている。

“自然は住む人々の宝である”とおさえたい。

(帯広市在住)

道 ニュース

新しい時代に向かって

大館 和広
(理事)

新しい年が始まりました。

2000年と人は浮かれています、自然界の生き物たちにとってはいつもと同じ時間が過ぎていくだけなんだろうと思う。私は2000年だ、21世紀だと浮かれていないでしっかりと前を向いて行きたいと思う。

昨年は千歳川放水路と士幌高原道路のふたつの大きな問題が解決したが、新しい年になったからといって今ある多くの問題は何も変わりはないし、私たちが解決の道を探り、行動していかなければ何も始まらないだろう。

協会がこれから取り組んでいかなければならない問題として、サハリン沖の油田開発による原油流出事故の問題があると思う（NC・No.103参照）。

重い腰をあげない行政への先制パンチとして昨年9月に早くも原油流出事故が発生した。幸い日本への直接の影響はなかったが、行政の危機管理の甘さを露呈したのだった。10月には苫小牧で「油污染対策推進研修会」が開催されたが、真っ先に被害を受けるであろうオホーツク海岸の自治体の取り組みが活発と思えないのは私だけだろうか。ひとたび原油流出事故が発生し、本道に漂着したならどのような事態になるかは簡単に想像できる筈なのに。

協会が独自で「原油流出対策マニュアル」の自然環境編でも示すことができたなら理想ではあるが、まずは基礎データの収集からでも始めたいと思う。日本にはオホーツク海沖の海鳥のデータすらないのだから。それには会員の協力が不可欠だし、その為にも会員の拡大に取り組んでも行きたいと思っています。

(紋別市在住)

護

— 嵯山の取り組みについて —

永らく秘山として知られ、ごく少数の登山者にのみ親しまれてきた嵯山にも荒廃の波が押し寄せ、昨今の痛められっぷりは他の追従を寄せつけない状態にまで及んだ。

その原因には幾つかの要因がある。ひとつには深部伐採を目的とした重機などによる爆発的な林道開発によるもの。もうひとつには必要の可否も判断しかねるような道道や国道の開通。重ねての無管理的な国有林などの解放。そして昨今の中高年登山ブームとツアー登山、更には追従するようにしての花ブーム。

そこには当然の如く盗掘や踏み荒らしが横行してくるのは必然であった。

1999年1月。このような幾つかの嵯山の荒廃原因を作り上げてきていることについて危惧してきた地元芦別市はもとより、管轄営林関係機関や山岳会などの結束によって、地元芦別市の宝でもある嵯山を守るべく嵯山自然保護協議会なるものを発足させた。

併せて北海道や環境庁、森林監理局などへの保護要請なども並行的に行いながら、絶滅の危機に貧している嵯山希少危惧植物の保護を目的とした行動を起こしたのである。

“嵯山5年間入山規制”という全国的にも前例を見ないような報道に、当然の如く賛否両論の電話や文章などが寄せられ、それぞれの意見をいただいた。

中にはただのわがまま的意見もなくはなかったが、大半の方々からはその英断的処置に対するの賞賛と協力が得られ、心強く感じたものであった。

協議会としては、あくまでも“入山禁止”ではなく“入山規制”というのが根本的発想

嵯山自然保護協議会会長

芦別山岳会会長 山岡桂司

であり、一般市民対象の「学習登山会」の開催による保護啓蒙と学習を徹底し、更には専門学者などによる「学術登山」により植生回復の確認等などによって、入山規制と保護の実際を確認していただいているのである。

現在、特に危惧している点は“外来植物の介入”の異常繁茂であって、1066.2mという標高の低さのせいもあり、入山口近辺はもとより山中の至る所にセイヨウタンポポやオオバコなどの侵入が見られ、固有希少植物達の生存維持の危惧が問題とされているが、森林監理局関係者や山岳会員のボランティア活動によって、これらの外来植物の抜根作業を継続し、一度に30kgほどにも亘る成果を挙げてきており、固有植物達の末永くの繁茂に明るい希望を与えてきている。

将来的には解放を目標とすると共に完全な管理のもとでの保護をすべく、絶滅の心配のある植物帯の通行回避や岸壁帯の安全対策に大同団結しながらの行動を継続し、地球の一角における点的存在でしかないが、固有植物も繁茂する宝の山である嵯山の自然を守っていくのが、地元としての使命であると感じている。



北方四島の自然保護について

北方四島自然問題協議会事務局長 近藤憲久

道東の公園と北方四島の公園を比べると、保護される面積はさほど違いはありません。しかし、北海道を「1」の生物ピラミッドとすると、北方四島は「4」以上の生物ピラミッドがあります。ヒグマ、シマフクロウ、オジロワシ、アザラシ、エトピリカ、ラッコ、シャチの個体数の多さ等、上げたら切りがありませんが、それらは、餌となる魚に由来していると思います。私が北方四島へ行った時、海はもちろんの事、川の魚の多さには驚きました。キュウリウオ、ヤマメ、アメマスなど、北海道のどの川を取っても卓ると思いました。

国後には「国立クリリスキー自然保護区」があります。ロシアで94ある自然保護区の一つです。クリリスキー自然保護区は、山頂から河口、海まで、全てを保護しています。もちろん樹木も。つまり、自然そのものです。これが、大きな特徴です。「人間がいなければ、自然はそう言うものだ」と実感させられました。

ロシアの「自然保護区」自体、「野生生物のための法律」で、日本には「ない」法律です。確かに、日本は「自然環境保全法」や「種の保存法」がありますが、それは「人間のための法律」に他なりません。「自然環境保全法」であっても、「但し書き」が多すぎます。でも、北海道の川は、河川改修や砂防ダムの影響で、魚が少なくなりましたが、人口密度も高く、生産性と安全性から言えばやむを得ないことかと思えます。しかし、今、「4」以上である北方四島の自然は失いたくなどありません。今、失うと未来の人には永遠にわからない、是非、未来へ残して上げたいのです。



国後のセオイ川支流（シマフクロウの多い所）
川の中には30cmぐらいのヤマメ、アメマスが群れをなして泳いでいた。

「北方四島自然問題協議会」(会長 高田勝)会員募集!

平成10年に出来た団体で、会員は、北海道、東京を中心に117名です。次のようなことを中心に活動しています。1) 北方四島自然問題に関する調査、研究に関する事、2) 機関誌の発行(年4回、コピー)、その他に関する事、3) 講演会、シンポジウムなどの啓蒙運動に関する事、などです。年会費は2,000円で、近藤憲久(TEL.01532-4-1305)までお申し込み下さい。

米カリフォルニアの 野生動物救護の研修の旅

12月、アメリカのカリフォルニア州に、野生動物救護の研修のため単身出かけた。3年前の1月ナホトカ号が重油流出事故を起こし油まみれの海鳥の救護に追われたのを昨日のように思い出す。その時、技術指導に来てくれた獣医師を訪ねての旅行。

カリフォルニア州立大学デビス校獣医学部付属のWildlife Health Centerを訪問。獣医学部のキャンパスは広く、一つの大学ほどあり、学生は千人に対し多くのスタッフがいる。動物病院は1階大動物、2階小動物の診察スペースで、野生動物のクリニックもある。

サンフランシスコの北側にあるMarine Mammal Centerにはアシカ類、アザラシ類が保護されていた。屋外には大中小のプールがあり、動物病院はこじんまりしていたが診察室、検査室手術

室、解剖室などがある本格的なもの。日本には海生哺乳類専用の施設はなく、救護のマニュアルすらないのが現状である。

カリフォルニアの中部にあるMarine Wildlife Veterinary Care and Research Centerへ行った。いるのはサメ1頭だけでガランとしていたが、いざ油流出事故が発生すると海鳥が搬入されるシステムになっている。施設はMMCと似ているがスペースがあり、油汚染の現場に出向く診療バスが印象的だった。

カリフォルニア州では過去に何度も油流出事故が発生したこともあり救護のネットワークがしっかり出来ている。今、北海道では「油対ネット」づくりが急務となっている。来年1月、各々の施設で研修をするツアーを計画中である。

※日刊スポーツに毎水曜日、コラム連載中。

※ホームページ：<http://www.aurens.or.jp/hp/animal/top.html>

日高横断道

中止含め再評価を 道自然保護協 道や開発局に要望書

北海道新聞2000年2月4日朝刊

当協会は、日高横断道路の工事中止を求める運動を行っており、先日、北海道知事と北海道開発局長に要望書を提出しました。今後ともご支援をお願いします。くわしくは会誌『北海道の自然』38号をご覧下さい。

北海道自然保護協会(後述)は、日高横断道(約120km)のうち日高側から約15・3kmは既に完成しているが、残りの約105kmは未だ完成していない。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。

日高横断道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。



日高横断道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。道は、道庁管内の道庁管内(道庁管内)と、道庁管内の道庁管内(道庁管内)とに分かれている。

活動日誌

1999年10月

- 18日 第4回拡大常務理事会
 28日 第6回夏休み自然観察記録コンクール
 上位入賞作品新聞紹介

1999年11月

- 10日 1999年自然保護学校開校
 15日 第5回拡大常務理事会
 20日 国際シンポジウム「北方四島の自然保護を考える」
 会場 かでる2・7 参加者130名

1999年12月

- 9日 1999年度自然保護学校閉校
 18日 会誌編集委員会
 18日 第4回理事会

2000年1月

- 17日 第6回拡大常務理事会
 22日 自然観察会（北大苫小牧演習林）
 参加者23名

寄付金

松井照子	10,000円
Wake up 北海道	105,668円

Wake up 北海道は、異業種の仕事をしている女性のグループ「北海道ありランド」が、北海道を元気にするために行ったボランティアイベントです。11月13日・14日、札幌で行われました。今回、プロスポーツ選手チャリティオークションの売上げの一部を当協会に寄付していただきました。ありがとうございました。

寄贈図書の紹介

ナキウサギの声が聞きたい

ナキウサギふあんくらぶ



知床の鳥類

知床博物館

百人浜花の歳時記

駒井千恵子

ワイルドライフレポートNo.18

自然ウォッチングセンター

北海道環境白書 '99

北海道

爺爺岳

佐藤 謙

要望書など

■1999年11月16日

北海道知事・北海道開発局長宛
 北海道・北海道開発局に対する要望書（6団体協同）

■1999年11月25日

北海道知事宛

苫小牧東部地域の土地利用に当たって「緑の回廊」を設置することの要望書

■1999年11月29日

林野庁長官宛

京極発電所（純揚水発電所）設置計画に伴う水源涵養保安林の指定解除に反対する意見書

■1999年12月20日

日本道路公団北海道支社長宛

長万部町・八雲町間の北海道縦貫自動車道（高速道路）建設に関する質問書

■1999年12月20日

北海道森林管理局長宛

北海道の国有林に関する質問書・要望書

*** お知らせコーナー ***

自然観察指導員講習会(2000)のご案内

- ◆共催：(財)日本自然保護協会 (NACS-J)
北海道自然観察指導員連絡協議会
 - ◆日時：2000年7月14日(金)～16日(日) 2泊3日
 - ◆会場：(財)おたる自然の村
(小樽市天狗山1丁目
国有林野152林班)
 - ◆講師：八木健三北大名誉教授 他7名
 - ◆受講対象と定員：18才以上で自然保護教育、自然観察会活動推進に意欲のある方
道内50人 道外10人
 - ◆費用：両会員に割引の優遇があります。(受講料、食費、登録料、保険、連絡費など未定)
 - ◆申込、問合せ先：
道内・北海道自然保護協会
TEL・FAX 011-251-5465
道外・日本自然保護協会
TEL 03-3265-0525 講習会係
- ※くわしい内容は4月始めに決まりますので、それ以後お申込み・お問い合わせをお願いします。

2000年総会と講演会のご案内

- 日時：2000年5月27日(土)
 - 場所：かでの2・7 520号室
 - 総会 13:30～15:20
 - 講演会 15:30～17:00
 - 「国後島・爺爺山の自然」仮題
火山地質 勝井 義雄 (札幌学院大学教授)
植物植生 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- *総会終了後の講演会は独特の語り口で好評のお二人にビデオやスライドを使用したフリートークの形でお話していただく予定です。きっと魅力ある講演会となるでしょう。万障くり合せてご出席下さるようお願いいたします。
*詳しくは別便でお知らせいたします。

以上のお問い合わせ・申し込みは
(社)北海道自然保護協会
札幌市中央区北3条11丁目加森ビル5・6F
TEL・FAX (011)251-5465まで
Eメール nchokkai@jade.dti.ne.jp

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員	4,000円
個人B会員	2,000円
(A会員と同一世帯の会員)	
学生会員	2,000円
団体会員 1口	15,000円

〔会費納入方法〕
郵便振替口座 02710-7-4055
北海道銀行本店(普通) 101444
札幌銀行本店(普通) 418891

編集後記

20世紀最後の年になりましたが今年もどうぞよろしく申し上げます。
昨年大きな懸案事項が解決され、改めて継続は力なりという事を思い知りました。
109号は日高横断道路、北方四島問題とこれからの当会の柱となるニュースを載せました。さらに皆様からのホットなニュースの提供をお願いいたします。
後になりましたが、いつも自然保護学校長をお願いしている鮫島惇一郎氏が、エンレイソウなどの研究と自然保護に貢献したことで、2月4日、「松下幸之助花の万博記念賞」(賞金500万円)をご夫妻で受賞されました。いつも協会に協力いただく鮫島先生、本当におめでとうございました。益々のご活躍を。
編集委員 福地郁子

※この紙は再生紙を使用しています。